様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７１０２９５

研究課題名（和文）中国南部との比較にみるベトナム北部の木造建築の独自性とその展開

研究課題名（英文）Study on the architectural characteristics of wooden temples and shrines in Northern Vietnam by comparing study case in Southern China

研究代表者
大山　亜紀子（OYAMA, Akiko）

日本大学・工学部・助教

研究者番号：７０４５９８５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：ベトナム北部で展開した寺廟の建築的特性について、中国南部（華南）における木造建築との比較により再検討した。中国南部の沿岸部および中越国境付近の遺構の調査により基礎的資料の充実を図るとともに、両地域の平面構成や架構、空間の特性について分析を進めた。これらの成果は体系化されつつあるベトナム建築史のさらなる発展に寄与するだけでなく、日本、朝鮮半島を含めた、中国木造文化影響圏における比較研究の足がかりとなり得るといえる。

研究成果の概要（英文）：This study based on field survey was intended to examine the architectural characteristics of Buddhist temples and shrines in northern Vietnam by comparing the study case in southern China. Architectural survey was revealed the originality of the plan, the wooden structure and the architectural special composition in northern Vietnam. These results were contributed for systematize of the traditional architectural history of Vietnam and to making a foothold in a comparative study on the traditional wooden architecture in Vietnam, China, Korea and Japan under Chinese wooden culture.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：東南アジア　ベトナム北部　中国南部　木造建築　仏教寺院

1. 研究開始当初の背景

（1）ベトナム北部の木造建築について

申請者は 1997 年よりベトナムでの現地調査によって収集した資料を中心にして、ベトナム北部における仏教寺院建築の編年指標を策定し、伽藍の変遷過程を主題とした調査研究を進めてきた。研究に着手した当初は、仏教寺院に関する既往研究は、考古や美術史、仏教史が中心で、フランスの研究成果もしくはそれらの影響の範囲にとどまり、建築学的な視座からの成果は見当たらなかった。また、保存修復の体制が確立していなかったベトナムにおいては、各遺構の造営・改修の記録が乏しく、そのプロセスや時期の判別が困難となっていた。このため、数次にわたる大幅な改修や修理により技術体系が解明されないままに当初の手法や様式が失われつつあった。

このため、考証に必要な基礎的資料として現地調査による図面・写真の記録、収集が急務とされたが、社会主義のベトナムでは外国人のみならずベトナム人研究者ですら自由に調査や資料収集ができる環境にはなかった。このため、ベトナム国立研究機関である社会科学院麾下の考古学院をカウンターパートとして調査を開始した。1999～2001 年度に実施した「ベトナム北部の宗教施設と村落構成に関する総合学術調査」(研究代表者:重枝豊)、および 2002～03 年度「北部ベトナム仏教寺院の伽藍構成の変遷過程に関する基礎的研究」（日本学術振興会特別研究員）を契機に、北部地域の主要な仏教寺院（62 ヵ寺、約 200 棟）のほか、北部・中部の宗教施設・民家等の木造建築について調査を実施し、研究の基礎的資料を早急に収集した。詳細な実測調査により、平面図や断面図等の基本図面を作図したほか、各部材の年代銘や建立・重修・寄進等に関する碑文など各建物の造営記録を詳細に複写し整理した。

これらの基礎資料に基づいて、仏教寺院を中心に建築技術的な編年指標を策定し、伽藍全体の変遷過程を考察したことがこれまでの大きな研究成果である。とくに、平面の柱間寸法比率、架構形式の分析から、各遺構の造営修復年代を特定・再検証したほか、小屋組や母屋桁配置の復元的考察により、母屋桁数、平面、架構形式の関連性を見出した点が本研究の特色といえる。

（2）中国南部の木造建築について

ベトナム北部に仏教が導入された時期は、中国支配下にあった北属期（B.C.111～A.D.938）の西暦紀元初期に溯るが、その後、ベトナム仏教の興隆に大きく関わった高僧には、福建省や江西省出身の中国僧などの存在が仏教史研究において確認されており、ベトナムの仏教建築の展開に中国南部の建築が密接に関係してきたことは明らかである。

このため、ベトナム仏教建築の研究を進める過程で、中国木造文化圏、とくに中国南部の関連遺構との比較検討により、ベトナム北部の仏教建築の独自性がより明らかになると考えてきた。

中国建築史研究は、歴史的・地理的状況の複雑さから建築材料、工法などが多様性に富んでいるが、田中淡博士によって時代や建物種類の区分に従った概論、各地域・各時代の代表的な遺構についての概要が整理されている他、大仏様建築との関連から福建省の建築について地方的特徴のなどをまとめた論考もある。また、関口欣也博士は、中世禅宗建築との比較をとおして、華南地域を中心に、南宋・元代の建築的特色や伽藍構成などの推移を論じているが、ベトナムの現存最古の木造遺構と同時期にあたる、明・清代を含めた各建物の細部を把握するには、中国南部においてもフィールドワークによる資料の収集は必須であった。

2. 研究の目的

本研究は中国文化圏に属するベトナム北部の木造建築技術について、これまでのベトナム北部における仏教建築の研究成果を基軸にして、①中国南部とベトナム北部の木造建築に共通する建築的手法や要素を精査するとともに、②中国南部との比較により申請者が蓄積したベトナム北部の木造建築技術の展開および独自性の再検討を試みるものである。中国を含めた周辺地域との比較研究は、東アジア文化圏における木造建築の特性に関する指標を策定する上で重要である。

ベトナム北部で展開した木造建築技術が中国からの外来的影響を受けたことは想像に難くないが、あわせてベトナム独自の自発的現象について考察する視点は、本研究独自の取り組みである。申請者がこれまでに構築したベトナムの仏教建築の指標を基軸としながら、周辺地域、とくに中国南部の木造建築技術との比較により、ベトナム木造建築の独自性が浮き彫りになることが期待できる。将来的にはこれらの成果が、ベトナム建築史の発展に寄与できるだけでなく、日本、朝鮮を含めた、中国木造文化影響圏における比較研究への足がかりとなり得るといえる。

3. 研究の方法

（1）研究対象の抽出および基礎的資料の収集

中国の特定地域（省・郡）における寺廟の平面構成や架構、伽藍配置等の推移や類型を分析し、それらの展開のパターンをベトナムで明らかにした技術的変容との比較により、両者の関連性とベトナム木造建築の独自性について考察を試みることが本研究の目的である。しかし、限られた期間と資料で両者の関連性を探るには、まずは国内で閲覧可能な資

料から、ベトナム北部の仏教建築を基軸にして、中国南部の建築に共通の要素を見いだすこと、調査対象を精査することが初期の課題となった。

現地調査の対象事例の年代は、ベトナムの木造仏教建築で現存最古にあたる 16 世紀以降としたが、中国南部では現存最古の南宋元代の木造遺構も含めた。また、ベトナムの調査にあたっては、考古学院をカウンターパートとし、情報の乏しかった未踏査事例や重要遺構について現地研究者から情報を得た。

これらの精査・検討を踏まえ、文献資料では限られた情報を補足するために、中国南部およびベトナム北部で現地調査を実施した。分析にあたっては、原則として申請者が実測・作成したデータを用いて進めるが、広範に研究対象が分布する中国南部においては、ひとつの寺廟に時間を割いて詳細な実測データを収集するよりも、まずは重要遺構の全体像と概要の把握につとめ基礎的資料の収集をはかることを目標とした。

（2）基礎的資料に基づく関連遺構の比較

ベトナム北部における仏教建築の成立と発展に中国が直接的・間接的影響を及ぼしてきたことは明らかであり、『営造方式』（北宋）など、各時代に編纂された中国の建築技術書等を読み解くことも重要であると認識はしている。しかし、本研究は中国南部との関連性から、ベトナム北部の木造建築の独自性について再検討を試みるための基礎研究という位置づけから、限られた期間においてそれらの膨大な資料を読み解くことによって時代の異なるベトナムの木造建築との関連を精査するよりも、現存遺構を対象にして、申請者がベトナム仏教建築研究でこれまでにおこなった柱間寸法比率、架構形式、伽藍構成の変遷などを中心にした分析と考察に重きをおいて研究を進めることとした。これらの成果から、仏教建築を基軸にしたベトナムの木造建築の独自性を浮き彫りにすることを目指した。

なお、中国における十分な調査成果が得られない事態も想定し、ベトナム国内の會舘建築や、中国僧の移入、交易、華人街の成立などを通じて独自の様式を発展させたベトナム中部の木造建築についても、暫定的に研究対象に含めた。申請者はこれまでに、ベトナム中部（トゥアティエン・フエ省、クアンナム省）の宗教施設、王宮、民家の調査研究にも着手しており、おおむねベトナムの木造建築に関する基礎的資料や調査環境は整っていた。

4. 研究成果

（1）中国南部およびベトナム北部の木造建築に関する調査と基礎的資料の収集

中国における研究対象地域の選定にあたっては、おもに①南沿岸部（福建、広東）、②ベトナム国境沿い（広西、雲南）とした。①は海上交易による交流があり、また、②の国境沿い地域はベトナムと地理的、歴史的に関連が深い。さらに、明・清時代に経済・文化が最も発達した③長江下流域（江蘇、浙江、安徽、江西）まで調査範囲を広げることを視野に入れて資料の精査を進めた。

この結果、2012 年 8 月、中国南部地域の広範にわたる沿岸部を中心に、上海市、江蘇省、浙江省、福建省、広東省、江西チワン族自治区に現存する、宋代（中国南部木造最古）から清代までの主要寺院 28 寺廟（100 棟以上）の木造遺構について、各建物の平面図や架構・細部意匠の記録などによって基礎資料の収集をはかった。なお、ベトナムの仏教は儒教、道教、開基・祖先信仰を混在しながら大衆化してきたことから、調査研究対象を仏教寺院に限定せず、霊廟建築等も含めた。

一方、ベトナム国内については、これまで未踏査となっていた中国国境沿いの地域において、2013 年 8 月に調査を実施した。文献資料の精査およびカウンターパートであるベトナム考古学院の協力と意見交換により、当初の研究計画を変更し、ベトナム北部のクアンニン省とニンビン省の 2 地域において、ディン（村落集会所兼神社）を中心に 14 寺廟にて調査を実施した。中国国境沿岸部のクアンニン省は当初予定していたランソン省、カオバン省に比べて比較的古い遺構が多くアクセスも容易であること、ニンビン省にはベトナム北部における典型的な工の字型伽藍の初期事例とみられる霊廟建築（17 世紀）が現存することから、調査対象を仏教建築のほか、村落の集会所兼守護神をまつるディンや霊廟なども対象に含めてベトナム北部地域での調査を実施し、平面図の実測、架構形式・年代銘の記録など基礎資料の収集につとめた。

（2）ベトナム北部と中国南部の関連性の検討

本研究ではベトナムの仏教寺院における木造建築の独自性に主眼をおいて分析を進めた。

〈平面構成と規模〉

中国の仏教寺院では、本尊を安置する仏堂を、正殿、大殿、大雄宝殿といい、南部における現存最古（宋元）の仏堂規模は、正面 3 間・奥行 3 間の三間堂であった。中国には内部空間の有効活用のひとつに「減柱法」などがあるが、これらの事例では柱の移動と架構の変形により礼拝空間を設置および拡張する傾向が指摘されていた。また、柱間寸法と詰組の関連から、桁行・梁行の全長を優先して柱間寸法を決定している可能性が明らかになった。明以降には、柱間数の増加とともに架構や組物の構造的発展によって、仏堂空間の規模が拡張されている。

これに対するベトナム北部の上殿は、正面・奥行 3 間の規模を固守している。梁間 3

間の単調な平面構成はベトナム北部の仏教建築の基本であるが、これは架構などの構造的発展がきわめて乏しかったことが起因している。黎朝以降の政治的混乱、村落共同体の結束、交易の振興がもたらした経済成長と仏教の大衆化によって、17 世紀から 18 世紀にかけて社寺造営の建立・再興の隆盛期を迎えると、15〜16 世紀には厨子のような閉鎖的だった上殿には、伽藍の整備と仏教信仰の変質に伴って、前堂・焼香との連結や正面の解放によって、礼拝空間が付加されていった。つまり、中国のように仏堂の規模拡大や架構の改良、柱の省略・移動によって、仏堂内部に礼拝空間を付加する方向へは発展しなかった。三間堂という南宋・元の仏堂規模を原型とし、それを伝統的に固守し続けたのがベトナム北部の上殿の特徴といえる。

〈構造形式〉

宮殿、寺廟、住宅などあらゆる中国建築の基本原理として「間架」と「挙折」がある。「間架」は正面の柱間数と、梁間の柱や束の総数（架）による建物規模の表記方法で、母屋桁毎に屋根面の高さと勾配を決定する「挙折」とあわせ、中国古建築構造の基本単位・原理となっている。また、営造方式には、品階に応じて材や建物の規模が定められていたこと、構造形式による格式の設定があったことは周知のとおりである。主要建物は、柱高を統一した裳階付の最高級建築「殿堂」と、すべての柱を屋根面まで延ばした裳階のない役所や大広間建築などを示す「庁堂」に大別されていた。

しかし、南部の宋元代建築はこの格式を問わず、柱が屋根面まで達する「庁堂」形式の架構法が採用され、架構をあらわにした全化粧屋根裏が特徴である。明以降には、規模の拡張とともに裳階や主屋の平天井、外陣部の輪垂木天井などを付加する傾向が読み取れた。

中国南部の特徴となる屋根面まで柱を延ばした構造の基本形や隅部の火打梁、鼻隠板などは、ベトナム北部の木造建築との共通点といえる。しかし、ベトナム北部の架構形式は、時代とともに細部意匠の変化や合理化などがみられるものの、水平梁と束による現存最古の形式を原型としながら、構造基本を大きく崩すような変化はみられず、中国のような多彩なバリエーションを示すことはなかった。ベトナム北部の仏教建築の原型の架数は、中央間 7 架（6 架椽）・脇間 3 架（3 架椽）であるが、今回対象とした中国南部の研究事例を管見する限り、同類の架構はみあたらなかった。また、架構の主要部材に水平材を多用する中国南部に対し、ベトナム北部では 17 世紀頃から脇間に斜梁の採用がみられるようになる。今後はベトナム中部との関連や住宅も含めた比較検討も必要と考えている。

このほか、軒を支える主要な構造部材である組物は、中国においては複雑・合理化してゆくが、架構の変化が乏しかったベトナムでは装飾の一つとして形骸化していった。両者の技術的な展開を考える上で重要な要素の一つであったが、17 世紀頃には中国から伝播していたとみられるもののベトナム北部では定着せず、構造材の現存事例は数例で、欄間の絵様として装飾化されている。また、ベトナム北部の寺院では類例のない輪垂木天井や大瓶束などを採用した寧福寺には、17 世紀再興の際に中国僧の直接的関与が及んでいたとみられる。18 世紀末に現れた特異な伽藍を示す金蓮寺、西方寺の各仏堂は梁間 3 間の原則は踏襲しながら裳階風に仕上げた意匠の変化も清の仏堂意匠の影響が及んだためとみられる。

〈伽藍構成〉

ベトナム宗教建築の主軸を通した左右対象の配置は、中国の典型的な手法にならっているといえる。現在のベトナム北部の伽藍は、三間規模の上殿に礼堂（前堂）と焼香を工の字型に接続した複合社殿を基本に、それらを回廊などでを連結した小空間の集合体である。

明清には建物とともに伽藍の規模を拡大していったとみられる中国の伽藍に対し、ベトナム北部では、三間堂の上殿と、17 世紀から 18 世紀に再興された伽藍の規模・配置を核にしながら、信仰形態とともに伽藍の空間構成を変質させていった。

この背景には、黎朝以降の政治的混乱と村落共同体の結束を背景に興隆したベトナム仏教が、女性を中心にした貴族出身の出家者の輩出を誘発し、彼らを勧進元とする仏教寺院の再興と仏教の大衆化の推進があった。

とくに礼拝空間における礼拝者の視覚的操作や増え続ける諸像の祭祀空間の確保、西方寺や金蓮寺という特殊な伽藍の出現と遷都などの変容に対応するべく、ベトナム北部の仏教寺院では、双堂という古代的手法とその応用によって、既存伽藍の構成要素と空間の拡張・解体・連結を試み続けたのである。つまり、伽藍全体をひとまとまりの仏堂空間として再構築していったところにベトナムの独創性が表れている。

ディンのような大規模空間を構築する発想と手法が同時期に存在したにも関わらず、礼拝者を主体にした空間へと変質する過程で、仏教寺院では上殿をはじめとする既存建物の規模形式をかたくなに守り続けようとした強い意志を読み取ることもできる。

ただし、礼拝空間である前堂や焼香、後堂、行廊などの各種建物が整備された 17 世紀から 18 世紀にかけて、ベトナム北部の典型である工の字型の伽藍が形成されたとみられるが、今回の調査では中国南部にはその類例を見いだすには至らなかった。また、その成立・普及の時期についても、霊廟建築や陳朝時代の家型埴輪の事例などを踏まえて、今後も検討

を要する。
　また、禅宗を基盤としたベトナム北部の仏教は、17 世紀前半において臨済宗中国僧による仏教書の普及やその弟子らによる臨済宗竹林派の再興によって隆盛している。これらの背景から、横山秀也博士や関口欣也博士らの禅宗建築研究のすぐれた成果を研究資料として、中国南部の影響を受けて成立した日本の禅宗寺院も視野に入れて研究に着手した。とくに、明末清初の 17 世紀中頃に福建省から来朝した隠元によって日本に成立した黄檗宗（臨済宗）は、日本では唯一天王殿を配置し大雄宝殿を回廊で囲う形式で、ベトナム北部における村落寺院の再興期と重なり、ベトナム北部における伽藍の展開を考える上で重要な比較対象となりうる。黄檗宗寺院の伽藍の起源や特性をより詳細にみてゆくことで、ベトナムの伽藍構成の独自性がより明らかになることが期待でき、黄檗宗伽藍の源流となる中国南部の事例についても研究対象とすることが今後の課題となった。

（3）ベトナム北部の木造建築の独自性

　以上の分析・考察の成果を踏まえて、中国南部との比較により、ベトナム北部における仏教寺院建築の特性を中心に試論をまとめた。
　17 世紀から 18 世紀の村落における伽藍の再興期や、18 世紀末の政治的混乱期において、中国僧の関与などによって新たな建築工法や形式が中国からもたらされたようであるが、ベトナム北部では外来技術の摂取による技術的改良や空間構成の発展には至らず、伽藍の配置形式や各建物の規模形式、構造の基本形を固守し続けてきたといえる。
　中国南部の木造建築との比較によってベトナム北部の仏教寺院を中心に木造建築の独自性を明らかにしたが、その起源については不明な点が多く残され、今後の研究対象の拡大等によって研究の継続を要する。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕（計３件）

① 大山亜紀子「ベトナム北部村落の寺廟と祭祀空間」空間史学研究会（招待講演）、東北大学、2013 年 3 月 15 日
② 重枝豊、大山亜紀子「江蘇省・浙江省に造営された宗教建築の平面構成と詰組配置に関する一考察」日本大学理工学部学術講演会、日本大学、2012 年 11 月 28 日
③ 大山亜紀子「ベトナム北部の木造遺構と家形土製品の関連性について—仏教寺院建築と陳朝時代の出土遺物の構成・意匠の比較をとおして」日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 分冊、2012 年 9 月 14 日、名古屋大学

〔図書〕（計１件）

① 大山亜紀子（共著）「ベトナム北部村落の寺廟と祭祀空間」、『空間史学叢書２』、岩田書店、2014 年刊行予定（掲載決定）

６．研究組織

（1）研究代表者

大山　亜紀子（OYAMA, Akiko）
日本大学・工学部・助教
研究者番号：７０４５９８５８